



### (1) マカオの面積を 5 倍に拡張する

横琴島は珠海市南部にある島で、かつては大横琴島（南部）と小横琴島（北部）に分かれていたが、今はその間の水域が埋め立てられ総面積 106 平方キロ（世田谷区の約 2 倍）の「横琴島」となっている。地図を見ればわかるように島自体がマカオに隣接しており、「国境」は今や細い川 1 本でしかない。しかしその風景は大きく異なり、マカオ側には大規模カジノホテルが林立し夜間も明かりが消えないのに対し、横琴島側は長らくほとんど開発がされておらず、海沿いにバナナ畑が広がっている程度であった。



↑ バナナ畑が広がる横琴島。後方中央にはマカオのカジノホテルがうっすら見える。

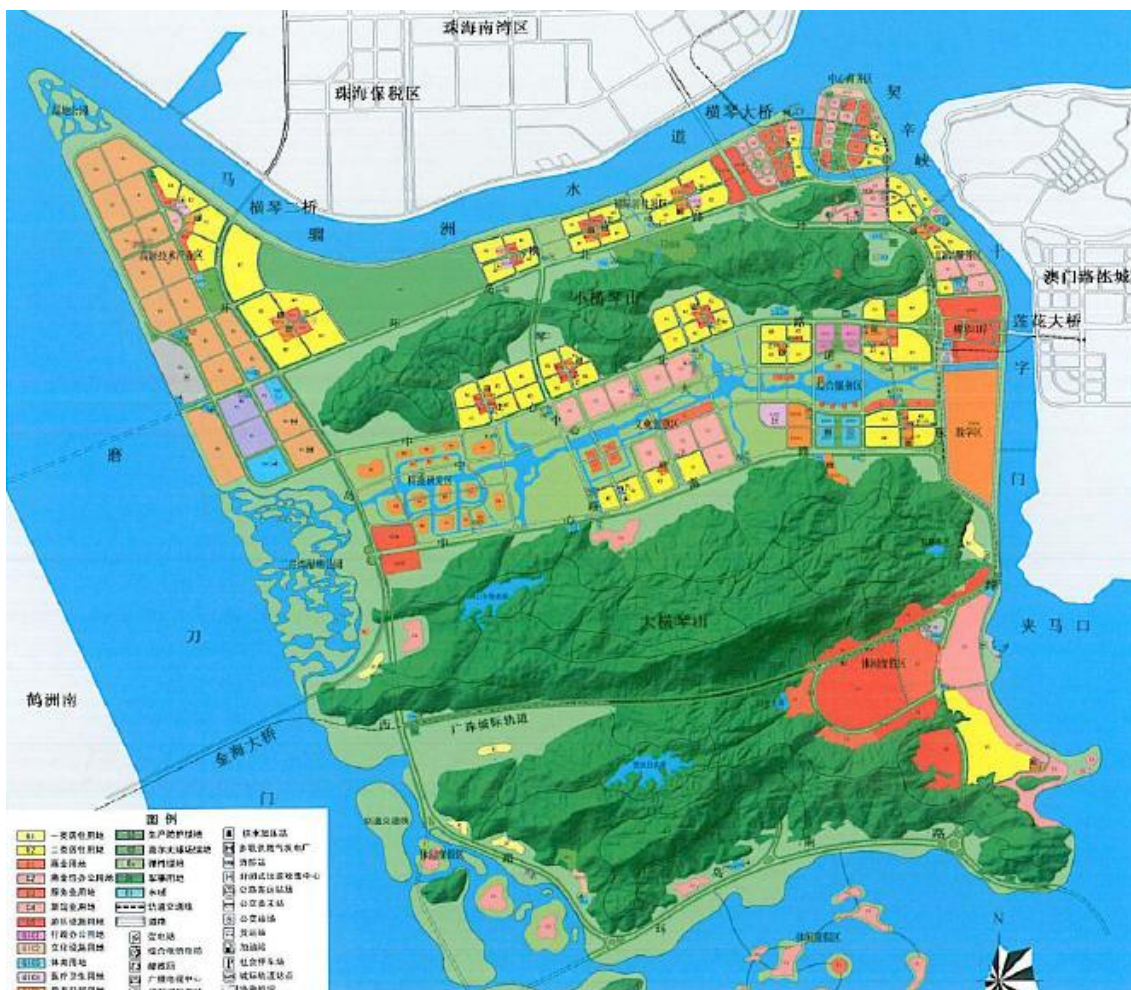
そのマカオだが、もともとマカオの面積は 30 平方キロとイギリスが割譲を受けた香港島（80 平方キロ）の約 4 割でしかない。香港はその後九龍、新界を加え 1,000 平方キロ、人口も 700 万人に拡大したが、マカオの人口は約 50 万人と香港のわずか 1/10 以下である。こうした中で中国としては返還を受けたマカオをテコ入れし、香港と並ぶ産業拠点に作り上げたいと考えたとしても不思議ではない。

横琴島の開発計画が正式に浮上したのは 2008 年以降のことであり、同年 12 月に国務院によって批准された「珠江デルタ発展計画（珠江三角洲地区改革発展規画綱要）」により重点プロジェクトとして位置付けられた。翌年 6 月にはマカオ大学の新キャンパスを横琴島に置くことが全人代常務委員会で承認され、8 月には国務院から「横琴総体発展計画」が認可され、同年末には「横琴新区」管理委員会が珠海市の管轄下に設置、更には胡錦濤総書記自らが横琴島を訪れて「横琴島開発は中央政府の重要政策である」と発言している。構想のポイントは横琴島を事実上マカオと一体化させることにより、その面積を約 130 平方キロと香港島を上回る規模にまで「拡大」させ、金融・サービス産業の拠点に発展させようというものである。

具体的には、今年 7 月に国務院が発出した「横琴開発に関する政策に関する批復」によれば、一般の経済特区より更に特徴ある優遇政策を実施することにより横琴島を「特区中の特区」として位置付けることとし、具体的には現在のマカオと横琴島との国境を事実

上撤廃、人や貨物はこの国境を事実上簡単な書類記入だけでフリーパスで移動できるようにするというものである。同時に珠海市内から横琴島を事実上切り離し、横琴島入島に当たり国境検査並みの検査を実施、貨物については入島時に輸出入扱いとし関税や増値税の措置を取ることが計画されている。要すれば「珠海市から横琴島を切り離してマカオに編入する」というイメージであろう。これにより横琴島は島全体が保税區扱いとなり、中国最大の保税區となる。

横琴新区の具体的青写真は下記の通りだが、①ビジネスサービス、②レジャー観光、③科学技術・研究開発、④ハイテク産業の4分野を重点産業として大規模投資誘致を進めることとし、製造業については「国際有名企業の研究開発拠点であれば歓迎するが、それ以外の製造業誘致は考えていない。」(横琴新区担当者)ということであった。



↑ 横琴島開発プラン。島東南部に大規模遊園地を設置し、東北部には金融をはじめとするビジネスサービスの華南本部機能を誘致するとしている。





↑ マカオと一体化した横琴新区の模型。国境の川の手前がマカオ。後方赤線で囲まれた範囲が横琴。

## (2) ライバルは重慶两江新区？

横琴島のキャッチフレーズは「香港・マカオと珠江デルタの経済一体化を促進する特区」であり、「上海浦東、天津濱海に次ぐ第三の国家級新区」である。横琴新区計画展示館のコンパニオンも来客に対して必ずこのフレーズを口にする。パンフレットにもその旨明記してあるのだ。

しかし、ここで疑問が沸き起こる。「第三の国家級新区」は「重慶两江新区」ではなかっただろうか？「第四」が確か先日確か浙江省舟山地区に決まり、同じく「第四」を狙っていた陝西省西安に煮え湯をのませたばかりのはずである。(China Weekly No.8 参照)「第三の国家級新区」と説明したコンパニオンに、「確か第三は・・・」と疑問を口にしかけた途端、横琴新区の担当者が「その話は後で説明するから」と質問を遮った。

ここで敏感な読者は「重慶」と「広東省」と聞いただけで何か感じるだろう。重慶市の書記は太子党の薄熙来氏、広東省の書記は共青团の汪洋氏である。薄熙来氏は年長でありながら汪洋氏の後塵を拝して重慶市書記に任命され、一步汪洋氏に遅れを取っている。これを巻き返すべくしきりに「唱紅」や「民生重視」を打ち出し庶民の喝さいを受けている。

一方汪洋氏はインテリには受けがよいがはっきりした実績がなく胡錦濤総書記の引きが頼りである。香港で報じられるこうした2人の関係を通じて見れば、「横琴島」は決して重慶の後塵を拝して「第三」の国家級新区になるわけにはいかないのではないかと勘繰る人がいてもおかしくはない。

実際、横琴島には幹部視察が相次いでいる。しかも共青团系の幹部が揃い踏みである。重慶には決して足を踏み入れていない胡錦濤氏、李克強氏も横琴には来ているし、温家宝総理も来ている。重慶・横琴の両方に来ているのは贾慶林氏と習近平氏だけである。「共青团メンツプロジェクト」となった横琴新区については、聞くところによれば、汪洋書記は外国企業幹部に面談するとほぼ必ず進出を促す発言をするほど熱心だという。



↑ この国ではこの方が来るかどうかで天地の差だ。隣はマカオの崔行政長官。



← 温家宝総理。



← 李克強副総理。右は広東省汪洋書記。

### (3) インフラ整備は大規模だが魅力に乏しい横琴新区

実際、横琴新区の開発は現在急ピッチで進んでおり、106平方キロの島全体が工事現場となっている。交通インフラでは現在広州から珠海北駅まで開通している高速鉄道を更に珠海-マカオ国境経由で横琴島中央部まで引き込み、珠海空港まで延長する計画のほか、マカオと横琴島を連絡する都市鉄道（軽軌）も整備して、その交点に当たる位置に高さ600mの超高層ビルを建設するという計画だ。

しかし、横琴新区が金融サービス機能で香港に勝る魅力を発揮できるのかどうかは判然としない。すぐ近くにある香港は金融だけでなく物流機能にも優れ、その法的基盤の安定ぶりや外国企業にとっての生活インフラの質等どれ一つをとっても傍目には横琴新区とは比較にならない。2015年には香港からマカオ・珠海を結ぶ橋が完成するとしても、香港から車で1時間もかかる横琴にわざわざ投資する企業がどれだけいるだろうか。

横琴島の青写真によれば、2020年には同島の居住者は①香港・マカオ・台湾の住民が1/3、②中国本土の住民が1/3、そして③残りの1/3はその他の外国人とし、珠海デルタ融合の見本都市として育成することになっている。しかし、今のところ（大陸政府の意向をある程度聞かざるを得ない）香港から以外、横琴新区に大規模な進出を考えている企業はまだほとんどいないようであり、特に台湾系企業は視察すら少ないようである。「騰籠換鳥」（製造業から高付加価値産業に産業構造を入れ替えるという汪洋氏が作り出したキャッチフレーズ）もよいが、港湾機能も乏しい横琴で製造業を締めだして金融サービス業を振興するというのはどうしても「絵に描いた餅」の印象が強い。

以上が私の正直な「横琴」感だが、同島の今後の発展が実際どうなるかは2020年を待たねばならないだろう。現在掲げられている通関特区政策（上述）と香港並みの税制だけでは企業誘致は困難としても、「市場の魅力」を背景に政府が何らかの「政策措置」を打ち出して横琴に企業を集める可能性は捨てきれない。また横琴島の将来は同時に広東省政府の次期リーダーが汪洋氏と同じ路線を歩む者となるかどうかによっても大きく左右されることになるだろう。先日昇格した朱小丹省長のような「共青团」のリーダーならば横琴島は引き続き様々な振興策の恩恵に浴することになるだろうが、仮にそうでなければ大きな不良債権にしかならないかもしれない。重機が島全体で唸りを上げる埃だらけの横琴島を後にして、まさにここは様々な意味で「中国の縮図」だと感じた。



↑ 重機があちこちでうなりをあげる開発現場。後方はマカオ島のカジノホテル。



↑ 島全体が工事現場だ。



#### (4) 今では忘れられた3つ目の香港 —湛江—

以上、香港と比較しながらマカオ、横琴島について紹介してきた。

しかし、歴史に詳しい方は、中国南部の租借地は香港、マカオの2つだけではなかったことをご存じだろう。香港がイギリス、マカオがポルトガルの中国進出拠点だったのに対して、フランスは1900年、当時フランス領だったインドシナに近い広州湾を99年間租借する「中仏広州湾租借条約」を締結した。湾という名前はあるが、その地は地図を見れば明らかなように海でなく現在の広東省湛江市である。Wikipediaによれば広州湾はマカオと異なり水深も深い良港だったようだが、その後の発展では今やマカオにも大きく差をつけられてしまっている。第二次世界大戦中、ポルトガルの植民地マカオが「中立港」となったのに対してフランスの植民地広州湾はイギリスの植民地香港と同じく日本に占領され、その後香港がイギリスに返還されたのに対して広州湾は日本の敗戦に伴いそのまま中華民国の領土となり、改革開放の恩恵に浴することもなくその後の発展は停滞してしまっている。



↑ 1942年地図。左から広州湾、マカオ、香港と3つの租界が仲良く並ぶ。  
(「世界飛び地領土研究会」ホームページより。)

先日、かつての広州湾、現在の湛江市を訪問したが、その中心部の光景はご覧のとおりで全くの地方都市である。かつてアジアに進出したイギリス、ポルトガル、フランスが開いたそれぞれの拠点のその後の運命には、100年を経て大きな格差がついてしまっていた。





↑ 湛江市中心街（中山街）の光景。

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。